

梅毒患者急増中

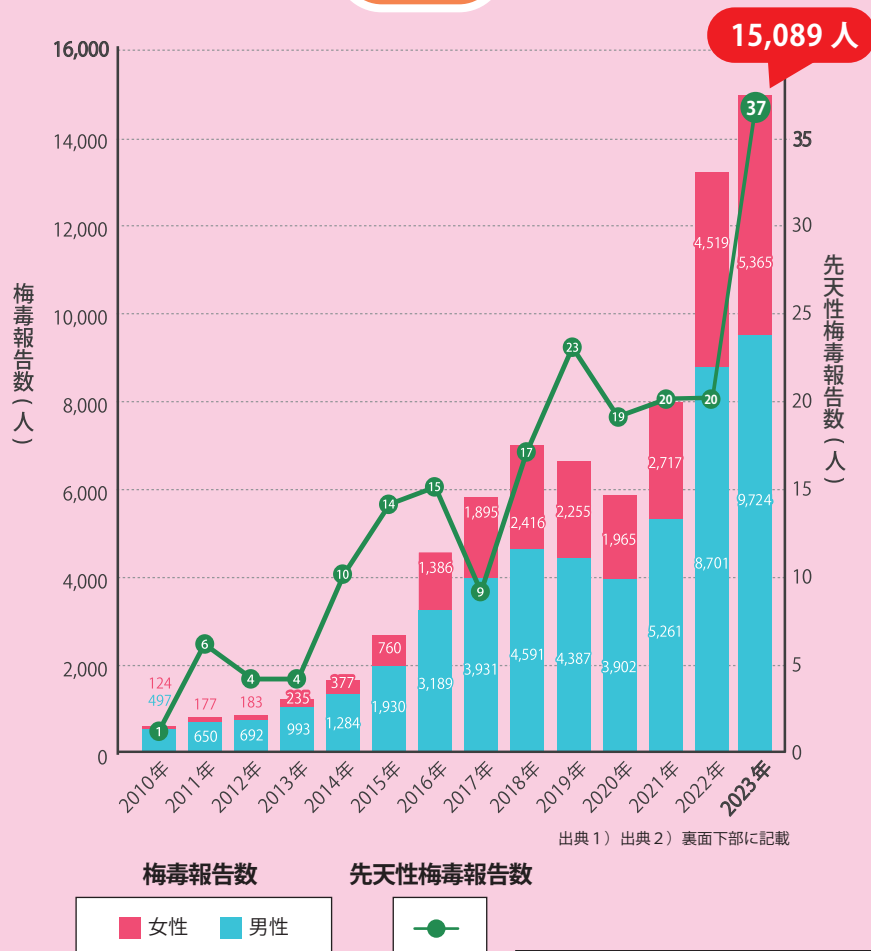
梅毒は偽装の達人です！

- 梅毒に特徴的な症状だけでなく、様々な診療科にまたがる多様な症状を呈したり、症状が見られない場合（いわゆる潜伏梅毒）があります。
- 初診患者さん（特に救急外来）や侵襲的検査・観血的処置、入院時など、節目節目に梅毒抗体検査を実施することが診断につながります。



早期発見

早期治療



監修：たによんスタートクリニック 古林敬一先生

梅毒治療のトピック

2022年1月に、国際的に梅毒の標準治療薬とされているベンジルペニシリンベンザチン筋注製剤が国内でも発売されました。これまで国内では、アモキシシリン500mg/回、1日3回、28日間(4週間)服用が治療の第一選択とされてきましたが、長期間の経口薬の服用についてはアドヒアランスの低下による治療失敗などの課題もありました。今回発売されたベンジルペニシリンベンザチン筋注製剤は、早期梅毒であれば単回の筋肉内注射で基本的な治療が終了されるため、患者さんのアドヒアランスに左右されずに適切な治療に繋がることが期待されます。

【ベンジルペニシリンベンザチン筋注製剤 用法・用量(成人および13歳以上の小児)】

●早期梅毒：通常、ベンジルペニシリンとして240万単位を単回、筋肉内に注射する。

●後期梅毒：通常、ベンジルペニシリンとして1回240万単位を週に1回、計3回、筋肉内に注射する。

※使用前には添付文書および適正使用ガイドを確認し、禁忌や適応症、ショック・アナフィラキシー・ニコラウ症候群等の急性副作用への注意が必要です。

※早期梅毒とは感染から1年未満の活動性梅毒、後期梅毒とは感染から1年以上を経た活動性梅毒とされています。(ステルイズ「適正使用ガイド」より)

出典3) 下部に記載

梅毒抗体検査は梅毒トレポネーマ抗体とSTSの同時測定で判断

	特徴
梅毒トレポネーマ抗体	<ul style="list-style-type: none">梅毒に特異的自動化定量法(ラテックス凝集比濁法など)は治療効果判定にも利用できる
非トレポネーマ脂質抗体(STS)	<ul style="list-style-type: none">梅毒の活動性を反映する非梅毒疾患でも陽性になることがある(生物学的偽陽性：BFP)

梅毒抗体検査結果の一般的な解釈

臨床症状	梅毒トレポネーマ抗体	結果の解釈	補足
あり	—	・活動性梅毒(梅毒感染初期)	非トレポネーマ脂質抗体(STS)の実施や時期をおいての再検査などから、総合的に診断を行う
	+	・活動性梅毒	
なし	—	・非梅毒 ・まれに活動性梅毒(梅毒感染初期)	問診などから感染の可能性が高い場合には、STSの実施や時期をおいての再検査を行う
	+	・活動性梅毒(潜伏梅毒) ・梅毒治療後の抗体保有者 ・まれに梅毒トレポネーマ抗体の偽陽性	STSの実施や時期をおいての再検査などから総合的に診断を行う

※梅毒抗体検査においては、梅毒トレポネーマ抗体とSTSを同時測定することが強く推奨される。また、いずれかが陽性の場合、必ず定量値を確認すること。
※従来の一般的な解釈(初期梅毒は梅毒トレポネーマ抗体(-)STS(+))に加え、近年の梅毒流行における臨床状況(梅毒トレポネーマ抗体(+)STS(-)の初期梅毒例の増加など)が反映された解釈となっている。

出典1) 梅毒の患者報告数

※「性感染症報告数」(厚生労働省) (<https://www.mhlw.go.jp/topics/2005/04/tp0411-1.html>)

※2023年の報告数は暫定値です。

「日本の梅毒症例の動向について(2024年第1四半期:2024年4月3日現在)」

(国立感染症研究所)

(<https://www.niid.go.jp/niid/images/epi/syphilis/2024q1/syphilis2024q1.pdf>)

出典2) 先天性梅毒報告数

「発生動向調査年別報告数一覧(全数把握)」(国立感染症研究所)

(<https://www.niid.go.jp/niid/ja/ydata/10410-report-ja2020-30.html>)

出典3) 梅毒治療のトピック

「ステルイズ水性懸濁筋注60万単位シリンジ/ステルイズ水性懸濁筋注240万単位シリンジ」

添付文書より

検査要項

検査コード	検査項目	材料	検体量	容器	保存条件	所要日数	検査方法	基準値	診療報酬区分番号	保険点数	保険収載名称
1397	梅毒定性RPR法	血清	0.6mL	A1 ↓ A2	冷蔵	1~3日	ラテックス凝集法	(-)	D012 01	15*	梅毒血清反応(STS)定性
1398	梅毒定量RPR法	血清	0.6mL	A1 ↓ A2	冷蔵	1~3日	ラテックス凝集法	1.0未満 R.U.	D012 05	34*	梅毒血清反応(STS)定量
1399	梅毒定性TP抗体	血清	0.3mL	A1 ↓ A2	冷蔵	1~3日	CLIA法	S/CO 1.00未満 (-)	D012 04	32	梅毒トレポネーマ抗体定性
0441	梅毒定量TP抗体	血清	0.4mL	A1 ↓ A2	冷蔵	3~6日	ラテックス凝集法	10.0未満 T.U.	D012 06	53	梅毒トレポネーマ抗体定量

*梅毒血清反応(STS)定性、梅毒血清反応(STS)半定量及び梅毒血清反応(STS)定量は、従来の梅毒沈降反応(ガラス板法、VDRL法、RPR法、凝集法等)をいい、梅毒血清反応(STS)定性、梅毒血清反応(STS)半定量及び梅毒血清反応(STS)定量ごとに梅毒沈降反応を併せて2種類以上ずつ行なった場合でも、それぞれ主たるもののみ算定する。



「梅毒診療の基本知識」はこちらから→

https://jssti.jp/pdf/syphilis-medical_basicknowledge.pdf

一般社団法人日本性感染症学会ホームページ掲載

